

「キリストの思いを抱く」

2022年10月23日

コリントの信徒への手紙一 2：1～16

佐々木 佐余子

パウロが第2回目の伝道旅行の際、アジア州、今のトルコで、これから東の方で伝道しようと考えていたのですが、イエスの霊がそれを禁じたので海峡を渡りマケドニアに行っただけでした。そこはこれから文明が開こうとしているヨーロッパなのでした。福音は文明の波に乗って世界にあまねくもたらされていったのです。こう見ると伝道は聖霊が先だって導かれるのだと感じます。パウロは第3回目の伝道旅行でエフェソにいた時、コリントの教会の実情を知らされ愕然としたのでした。3節に「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」と言っています。これはパウロが最初コリントに来た時(第2回目の時)の心の状態でした。彼は持病を持ちアテネでの伝道が失敗に終わってユダヤ人から激しく迫害されたのです。使徒言行録を読むとこうあります。「死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、『それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう』と言った」(17:32)のです。パウロはアテネでの期待が外れて今コリントに来ているのです。この自由な気風の町で果たして宣教できるのだろうかと思わなかったでしょう。しかし、パウロは「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」(使徒 18:9,10)と主の示しを与えられたのでした。この間就任式があった時、ある先生の祝電でこの御言葉が添えられていました。いただいた時はうれしいと思ったけれど、少し大げさだと思ったのも事実です。わたしはパウロのような大使徒ではないし、そのような励ましを受けるような者でもないと思うので、少しオーバーではないのかしら、と思ったのです。でも先生のお気持ちはありがたくいただいて、お気持ちに添えるように私なりに頑張りたいと思います。また、全然存じあげない先生から祝電をいただき、プレゼントもいただいたのは驚きでした。もしかしたら、風間先生の関係かしらと思って聞いたら、「そうです、私は古くから風間先生とは友達で」、と言われました。でもどうして私にプレゼント付きの祝電をくださったのかは不思議です。それで、「わたしの民が大勢いるとはこういうことなのか」と感じました。

6節から読みますとコリントの教会では、3種類の人々がいたのです。一つの型は、2章6節にあるように、「信仰に成熟した人たち」です。2つ目の型は14節にあるように「自然の人」です。3つ目の型は「霊の人」です。1つ目の型はパウロの語る十字架の言葉を深く理解できる人たちです。このような人たちにはパウロは知恵を語ると言います。その知恵とはこの世の知恵ではなく、例えば皇帝やこの世の支配者たちが誰一人として理解できない知恵なのです。2番目の「自然の人」とは、生まれながらの人でもありますが、その人が自然流に生きている人です。その人たちは神の霊に属する事柄を受け入れません。14節にあります「その人にとって、それは愚かな人であり、理解できないのです」とあるように

霊が備わっていないのでパウロの知恵の言葉を理解できないのです。3つ目の「霊の人」はさらに聖霊によって新しく生まれた人であり、神の深きみ旨を知って、すべてのことを正しく判断できる人です。この霊の人は、教会の様々なもめごとにも正しい判断ができる人なのです。そして、自らは誰からも判断されることはない人なのです。「あの霊の人は正しい」とか「正しくない」とかそのような判断をされることはない人なのです。さあ、このような人は一体誰なのでしょう。その人は、「生きてるのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ書 2:20)と言った人なのです。そう言うと思ひ当たるでしょう。

コリントの教会の人たちは様々な人々がいて調和を欠いていました。でも自然な人も少しずつ信仰を与えられて、成熟した人になっていくのです。昔、ガリラヤ湖で主イエスがお話しされた時、集まった人々、弟子たちや住んでいる人々たちでした。最初はほとんど自然の人達ではなかったのでしょうか。そのような人たちが福音を受け入れて少しずつ成熟した人へと変えられていくのです。私たちの教会もそうですね。この間の婦人会ではそのような話題になりました。私は約10年ぶりに皆さんとお会いしたのですが、前と、とても変化した人がいました。良く変わった人という意味なのですが、もう驚きました。すっかり大人になって。こういうのをホーリネスでは聖化というのでしょうか。これは信仰の御利益ですね。私も変わらせていただきました。何しろ苦勞したので。でもその苦勞は人として良い苦勞で少しはましになったかしらと思います。もし、教会に行っていなかったら、どうなっていたでしょう。教会の宝を知らないで無益に生きていたかもしれません。皆さん方はどうでしょう。婦人はぎっくばらんに話し合えていいですね。それからここには壮年会はないので作ったらどうでしょう。男は男同士で話が弾むのではないのでしょうか。壮年会という名がふさわしくないのなら、「男の会」とか「パウロ会」「テモテ会」でもいいし、きっと良いお交わりが出来ると思います。今、高齢化が進んでいます。身寄りのない方々は1人で寂しいらしいです。食事も1人では味気ないですね。私は土曜日は1人で夜食事をしていますが、つまらなくて嫌になります。でもこれが御用だからと思って1日だから「いいや」と思い我慢しています。牧師は中性なので、婦人会に行ったり、男の会に行ったりできるので面白いかもしれません。16節に『だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。』しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています」と語っています。鍵かっこにある御言葉はイザヤ書40:13節が引用されています。イザヤ書にはこうあります。「主の霊を測りうる者があるか。主の企てを知らされる者があるか」とあります。似ていますね。パウロは旧約聖書を見ながら引用したのでしょうか。それとも暗記していて、スラスラ出てきたのでしょうか。いずれにしてもすごいですね。あの頃は巻物に納められていてユダヤ教の会堂にしかないはず。祭司しか参照できないはずなので多分暗記していたのかもしれませんが。その意味は、何人(なんびと)も主の思いを知って、主のことを他に教えることは出来ないが、選ばれたクリスチャンにはそのことが許されている、というのです。

話は大変変わりますが、鳥のダチョウっていう鳥、ご存じだと思います。大型の鳥で砂漠

のサバンナに生息する鳥です。このダチョウは子どもを育てるに大変無責任らしいです。旧約聖書の「哀歌」にこのようなことが書かれていました。「山犬ですら乳を与えて子を養うというのに、わが民の娘は残酷になり、荒れ野の駝鳥のようにふるまう」とありました。これはどういうことかということ、ダチョウは自然界では母性愛を持たない動物の典型だということです。ダチョウは太陽の熱によってふか（孵化）させるため砂に産んだ卵を置いて温めない、卵が殻を破ってひなが生まれると、そのひなは1メートルにもなって自力で立って草を食べようになるので母鳥はほったらかしにしてしまう。ということなのです。それから「ヨブ記」の義人と言われているヨブもこのように言っています。「駝鳥はその卵を土の中に捨て、これを砂で温め、足でつぶされることも、野の獣に踏まれることも忘れてる。これは神が駝鳥に知恵を授けず、悟りを与えなかったゆえである」とありました。言い換えると駝鳥は薄情で無分別であり、ひなの面倒を見ることをせず母性のない鳥である、と言っているのです。大分悪く言われています。でもよく調べてみると、今はネット社会であるので簡単にわかるのです。昔は厚い百科事典で調べたりしたので時間がかかったのですが、今はすぐ調べられるのでいいですね。ダチョウは自然環境に合わせて子育てをしているようです。そんなに愚かな鳥でもないようです。ダチョウは2メートルを超える大型の鳥で群れて生活するのです。ダチョウは1回で1～8個ぐらゐの卵を産み、気温が摂氏50度あるので温めることは余りせず、卵からひなになると丁度雨期になるので、生まれた子供はすぐスタスタ歩きだして生えた草をたべて成長するのです。親から餌をもらって食べるということはないということです。それですぐ2メートルの鳥になってしまうということでした。親の手がかからない鳥と言えます。それで言いたいのは、日本のクリスチャンも多くは同じ環境で生まれ育っているのではないか。卵からひなになってすぐ自力で成長するようにパウロもそうですが。ペトロもそうです。神さまから直接召しを受けて聖霊によって育っていくのです。最初は「自然の人」だけれど、福音を受けることによって成長し、「成熟した人」になり、ある人は「霊の人」として使徒として伝道の器とされるのです。

アメリカのコネティカット州に、ホーレス・ブッシュネルという牧師がいました。この人は牧師であり弁護士なのですが、このように言っています。「キリスト者の家庭に生まれた子供はキリスト者・クリスチャンになるのではなく、もう生まれながらのキリスト者なのだ」。そうですね、母の胎内にいる時から、母と一緒に祈りし、聖書を読み、讃美歌を歌ってやがて生まれ出るので。ですから最初から「自然の人」というのではなく、「成熟した人」と言えるかもしれません。でもだからと言って安心しないでください。そういう人もイエスさまというブドウの木にしっかり繋がっていないと良い実がならないのです。

ブッシュネルはこう厳しく言っています。アメリカでは子供たちを教会に導いて礼拝を共にし、福音のすばらしさを教えている。このキリスト教の養育があったので子供は教会で育っていった。だから今も教会の出席率は高いが、ヨーロッパの諸国はこれが出来なかった。今ヨーロッパはどこでも、特にドイツは日曜日、教会は閑散としている。国教なので建物は立派だけれど礼拝に行く信徒はすくない、と言っています。信仰の継承がないのです。耳が

痛い。ブッシュネルに言わせるとこれは駝鳥のほったらかし養育に似ている、というのです。家の娘は私が岩槻教会の伝道師になったのでそのお祝いで洗礼を受けると言って、受けたのです。息子の方もお父さんが洗礼を受けたので家はクリスチャン・ホームになったので僕も受ける、と行って受けたのです。その位の程度なのです。それでも初めの内は何とか祈禱会に出たり、伝道用パンフレットを配ったりしてくれましたが、その内やめてしまいました。今は籍だけあって3人とも行っていないのです。私としては情けないと思ったり、面目ないと思ったり指導力がないのかと考えたりして悲しいです。牧師の家なのだから家族全員で教会に行って良き御用をしなければならぬのにと考えています。ですから申し訳ない気持ちですね。このような者を神さまはあえて用いてくださり七里の伝道のため働きなさいと言われているようなので、その召しに何とかお答えしてこれからも働きたいと思っているのです。この間就任式で問われました。「あなたはこの教会に招聘されたことを神のみ旨であることを信じ、主の栄光のためにその身をこの職に捧げる覚悟がありますか」と問われました。このことを約束したので反故にしないよう努めたいと思います。

私たちこれからもキリストの思いを抱いて信じて歩みたいと思います。